

たくみ

Craft & ManShip

特集 谷道和博吹きガラス展
特集 たくみ・アーカイブス

第43号

台湾・先住民の生活文化と日本

先日、NHKテレビのドキュメントで、かつての日本帝国時代の、台湾における植民地統治の悲惨な実態について放映していた。日本による植民地支配の中で朝鮮や満州に比べ台湾が比較的統治が安定し、戦後も友好的な関係を維持してきたと一般には信じられてきた。だから日本の台湾統治が成功例ではなく多くの矛盾や失敗を覆い隠したものであるというNHKの映像は、国内の一部や李登輝元総統系の親日派団体からの反発の嵐にさらされたのであった。台湾は、日清戦後の明治二十八年(一八九五)四月、賠償として日本に割譲され、五月に海軍大将樺山資紀(白洲正子の祖父)が総督に就任した。直後に反乱が起り台湾民主国の設立が宣言されるが鎮圧され、また昭和五年(一九三〇)五月の先住高地族霧社による日本人襲撃事件も鎮圧され、実に五十年にわたり日本の支配下にあった。

日本の敗戦後(一九四五年)は、毛沢東の中国共産党に敗れた蒋介石の国民党が台湾に政権を作り、中国本土とは一線を画して今日に至っている。

台湾がそれから六十三年の間、外交的、経済的に我が国と密接な関係を維持してきたのは周知のことだが、このことがかつての日本による統治が善政であったことの証にはならない。

柳宗悦は、戦争たけなわの昭和十七年と十八年、あわせて二ヶ月間台湾を旅し、彼の地の住居、竹の家具や、陶器、織物などさまざまな生活文化を調査した。この折り柳が蒐集した台湾先住民の衣裳(かつては蕃布と呼ばれていた)はパイワン族と、タイヤル族のものが主だが、これは柳が戦時中台湾からの帰りの船中で命に代えても持ち帰ることを心に秘めた品々であった。柳は帰朝後、それらの布を生んだ人々への敬愛の念と、それらがかの有名な蜀江錦(法隆寺伝世)に比肩することを記した。(十二頁上段に続く)

たくみ企画展

第十回 谷道和博吹きガラス展



左から、あられ紋台付蓋物、
泡玉栓台付デキャンター、泡玉足ワイングラス

会期 平成二十一年五月三十日(土)～六月四日(木)

五月三十一(日)は営業いたします。

会場 銀座たくみ二階サロン

午前十一時～午後七時(日曜日、最終日は午後五時半まで)

いあいさし

朝、窯の蓋を開けると真珠色の淡光と高熱。まるで太陽のコロナと対峙している様な緊張感で仕事は始まる。

溶けたガラスは自由闊達だが、静かに吹き竿に巻かれるのを待つ。試行錯誤しながら新しいデザインを、培ったテクニクで漸く器に吹き上げる。その繰り返し積み重ね。そんな牛歩に発表の場を与えて頂き、たくみ展も十回目、二十年以上の御付き合いになった。何依り毎回足を運んで下さる皆様には、いつも大いなる力を頂いての今日に他ならない。

お気に入りの器が見つかりましたら幸いです。

谷道 和博

感謝のことば

井上一雄



ノッティングの椅子敷

私は四月十五日を迎えて八十五歳となりました。この二、三年耳は遠くなり物忘れがひどくなつて来ました。テレビを見ていて同じ年代の人で痴呆の状態で、話すことも判断も出来ず、徘徊する人を見て、それは他人事ではなく、早晚そうした時を迎えることが予想されるようになり、このまま逝くことになつたら、感謝の言葉も残さない

でこの世を去ることになり、今なら拙い字でも読んで戴けると思い立つて筆を取りました。

先ず現在、教会で交わりを戴いている兄弟、姉妹、またさまざまな事でお世話になつている方々に心からなるお礼を申し上げます。

私は十八歳の時に病氣をして、その時に自分の生きる方向を見出せないで悩んだ時に、キリスト教の信仰を持つた事で救われ、協会は私の生活のすべでの、よりどころとなりました。

昭和十四年（一九三九）の夏、私は袋井のメソジスト教会の外村吉之介牧師の招きで、袋井に働きの場を与えられて、袋井に行きました。そこで修善寺教会の佐藤まつゑと出会いました。彼女は、外村牧師夫妻が機織りをして居られて、住み込みで習ひに来ており、後に外村牧師夫妻の御媒酌で結婚し家庭を持つて三島に来て住みました。そ

れは昭和十八年（一九四三）、戦争の最中のことでした。三島教会は私ども夫婦を受け入れて下さり、信仰の交わりの中に入れて戴きました。

妻のまつゑが外村先生から学んだ、手織りで織つたものは、全国から集めた民芸品を扱う、東京銀座の「たくみ」工藝店を外村先生が紹介して下さり、納品して家計の大きな助けとなりました。まつゑの機織りの音は私が勤めていた時も耐える事がありませんでした。

そのまつゑは不治の病で若くして逝きました。残した織りの技は私と娘が受け継ぎ、私は機に上がつて織るときにはまつゑは今も私の中に生きて、共に織っている思いで居ります。

私は、まつゑが袋井で習つて織つて来た小さな花瓶敷きを、皆様に私とまつゑの合作のものとして、何かの下敷きに使つていただきたいと織りました。

た。ささやかな感謝のしるしとして、お使い戴ければ幸いです。

皆様の上に神様の祝福がありますように。

一九九八年四月十五日 記す

◇

父の遺した「感謝のことば」

師走も半ばを過ぎ慌ただしくなつて参りました。(中略) 喪中のお知らせ

の通り末期がんでホスピスに入院しておりました父が亡くなりました。

母の時代からの長い御愛顧お引き立てに深謝いたします。私が引き続いてノッティング(木綿や羊毛を用いた手織りの敷物)をお納め出来れば良いのですが、染色の日光堅牢度の商品価値に誇りが持てず、(中略)私の仕事には終止符を打たざるを得ません。

三島の井上さんご一家の染織の仕事について

長いお付き合いであった井上一雄さんが亡くなったというご通知を、次女の千恵子さんから頂いた。享年九十五歳であったという。あわせて遺作のテーブルセンターと、亡き母上まつ糸さんがお元気なころ、柳宗悦、外村吉之介両先生から頂戴したという色紙もお納め下さいということであった。

つきましては柳宗悦先生と外村吉之介先生御揮毫の色紙を、これまでの感謝のしるしとしてお送りさせて頂きますのでどうぞお納めください。

これまでのお心遣いに重ねて感謝申し上げます、お店の発展と皆様のご健勝を心よりお祈り申し上げます。

たくみ様

井上千恵子

井上さんご一家は、戦前に外村先生が静岡県袋井の教会におられたころの信者であり、まつ糸さんはおそらくは最初の染織のお弟子さんであった。

たくみの皆が、三島の井上さん“と云い慣わしていたまつ糸さんが、外村先生の教え通りに染め、そして手織りされた品の種類はそう多くはない。木綿の卓布、センター、花瓶敷、それに手紡ぎ、手染めの綿糸や毛糸によるノッティング(敷物)が主な作品であつ



柳宗悦書の色紙

た。

まつゑさんはいつも、その年に作る以上の、五年、十年分もの大量の毛糸や木綿糸を染め、自宅の工房に在庫されていた。糸は沢山あるから、いくら注文下さってもかまいませんと言われたこともあった。

病を得て壮年期に亡くなられ、あとを女子美大で染織を学んだ千恵子さんが継ぎ、一雄さんが退職後はお二人で



外村吉之介書の色紙

手分けして製作を続けられた。とりわけ千恵子さんが担当したノッティングは好評で、たくみから人吉の魚座民藝店やビームスに常時供給され、納品が間に合わないほどであった。

これらの品々をもう作ることが出来ないという。昭和十六年、太平洋戦争たけなわの頃から絹糸、綿糸、羊毛など国の生産、流通の統制下にあつて、個人では手に入りにくい状況であった。手に入る限りの原材料を、紡ぎ、染め、いつまでも仕事を続けられるよう数多く在庫しておく心がけは外村先生から学んだものであった。

それらの材料も底が尽き、現在とくに染色の堅牢度に誇りが持てず、仕事を止めざるを得ないという。

柳先生も書いているが、時代の変化とともに、優れた作り手の仕事我突然に失われてしまう寂しさはたとえ様もない。井上ご夫妻を偲び、頂戴した柳、

外村両先生の色紙の紹介をしたい。

『今日モアリ オホケナクモ』

宗悦

柳の心偈しんごうたの一の仏偈、その第一の文、「よろずのものは我れ独りではない」という意味、仏教の示す最も根本的な真理のひとつ。すべてが多くの力に支えられたお蔭である。「オホケナクモ」は「勿体なくも」の意。逆境もまた光明、感謝への道に他ならないという。

『対友安思 向器躍心』

吉之介

友に対しては思い安らかに、器に向かうときは心躍る、常にそうありたいものである。

(志賀直邦)

たくみアーカイブス(三)

柳宗悦と竹細工師 青木さんのこと

志賀 直邦

第一回日本民藝館茶会のこと

日本人の伝統文化や生活意識において「茶の湯」の与えた影響の大きさを、誰しも否定しないであろう。「民藝と

茶」という主題について柳宗悦は早くから深い関心をもち、「茶の改革」や「茶の美」など数々の論稿を公にされた。そして昭和三十年(一九五五)十二月五日、駒場の日本民藝館で、館の所蔵品と河井寛次郎、濱田庄司、黒田辰秋、船木道忠ら同人作家の茶碗や茶器、柳の見立てによる袱紗や新作の茶道具などをを用いた『茶会』を開いた。

いま大阪日本民藝館で「茶と美―柳宗悦・茶を想う」と題して開かれていた特別展は、柳による第一回民藝館茶

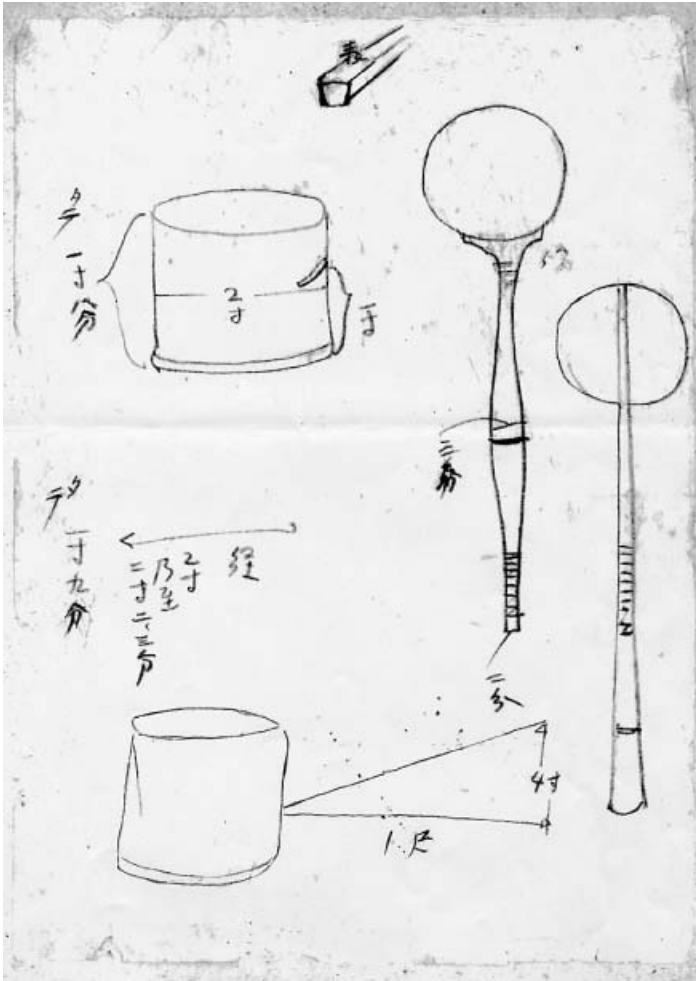
会の全容とその精神を再現しようと試みたもので、雑誌「民藝」の今年の四月号でも特集が組まれた。

昭和三十年といえば今から五十四年ほど前だが、当時「茶道」は戦災による荒廃から復興しつつあって、裏千家の家元などアメリカでもしばしば茶会を開き、日本の伝統文化の精華として啓蒙活動をしていた。たとえば「茶道」を、昔から海外でも広く知られたティーセレモニーではなく、アートルビングという言葉で説明し、日常的な親近感をもたせようとした。そういった時代背景の中で「芸術新潮」誌が昭和二十九年七月号で「日本芸術シリーズ5―茶道」と題して各流派代表による座談会を開いた。出席者は裏千家、

遠州流各家元、宗徧流、江戸千家各家元、そして司会者は青山二郎であった。この座談会は司会者の予断もあつてか議論が「茶道」の本質論からはずれ、家元制度や道具茶の是非論に話が終始した感があつた。「芸術新潮」では、次の八月号で「日本芸術シリーズ6―民藝」の座談会を企画し、柳が図版の選択とその解説を行っている。

柳宗悦が前月号の「茶道座談会」に目を通さなかつた訳はなく、柳の究極の願である仏教の真理と民藝のそれとの一致、茶の美と民藝の美の合一への想いはますます熱いものがあつたと思う。そのころ日本民藝館に勤務し、側近として柳を支えた浅川園絵は次のように記している。

『又しても、御口をついて出る「茶道」への辛辣な批判は、真の「茶道」、大切な日本の「茶道文化」への切なる愛情の情(こころ)であると思われまます。そして先生の「茶道哲学」は当然「茶



柳宗悦が青木隆介に宛てた柄杓製作依頼の指示図面

会」といった形で具体的に示される日
が来る筈でありました』(「民藝」昭和
三十一年三月号)。

そしてこの茶会には柳の選択と創案

によるさまざま茶道具が用いられ
た。これについてはその折の「民藝・
三月号」(茶道特集)の口絵に柳自ら
が解説をしている。また今年の大坂で

の「茶と美」展を特集した「民藝・四
月号」記載の「茶会記」からも知るこ
とができる。

柳先生と竹の柄杓

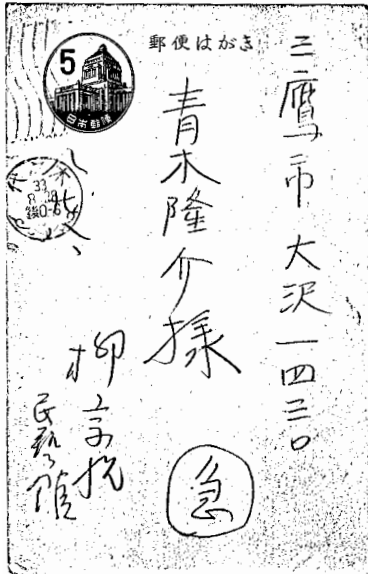
柳によって「民藝館
茶会」のために新しく
生み出された茶道具
は、袱紗、飾り棚、桜
皮の角茶入、鼈甲べっこうの茶
杓、竹や曲物の柄杓びやくほ
かいろいろあるが、こ
こでは真竹まだけの柄杓につ
いて筆者の知るところ
を紹介したい。

第一回、第二回とも
竹の柄杓の作者は東京
三鷹市在住の竹細工師
青木隆介である。青木
の工人としての履歴に
ついてはあとで触れる

が、柳は青木の人柄とその忠実な仕事ぶりをことのほか愛したようだ。

ところで茶会に用いられた竹の柄杓だが、柳の解説文によると、『表皮を活かし、且つ柄の形にもつと確かさを与えた。在来のが余り悪いので、見えるほど見事になった。(口径一寸九分、柄の長さ一尺一寸)』とある。(「民藝・茶道特集号」)

この折の柳による指示図面を今から二十三年前、晩年の青木翁から筆者が



柳が青木に送った葉書の宛名書き

預かり今般の大阪日本民藝館での「茶と美」展に参考資料として展示していただいた。それを参照すると、指示図面にある寸法と出来上がった実寸とが若干異なることがわかる。

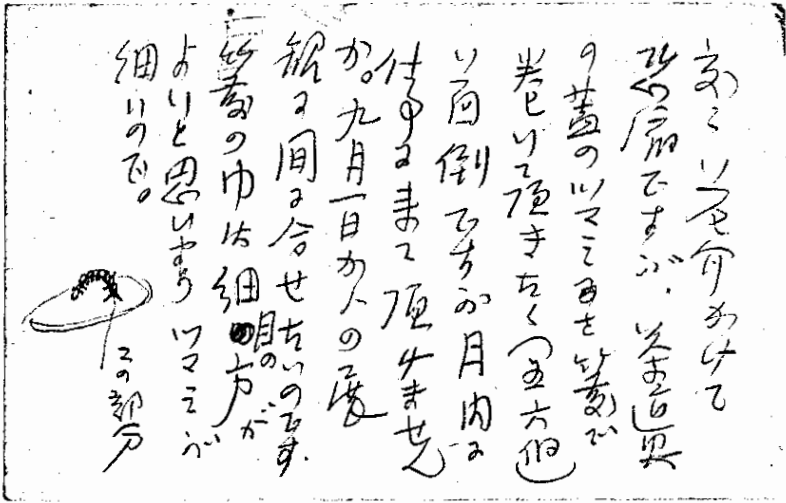
たとえば柄の長さが図には一尺とあるが、実物の寸法は一尺一寸(約三十三センチ)である。これについてある本によると、今の柄杓の柄の長さはおおむね一尺だそうで、千利休在判といわれる古作はほぼ一尺一寸という。こ

れは戦国の昔、茶席で丸腰の亭主が、柄杓を脇差に擬した長さによるという。柳の図の寸法が今の寸法ではなく、利休の用いた寸法と同じというのも面白い。これは民藝館茶会が大広間の茶であったことや、用いた釜が大

葎あられや豪農などの日常の湯釜を用いたことによる。また合あひ(水汲みの部分)に対する柄の角度からしても風炉用の品であることがわかる。

柄の形態も図と実作では異なる。とくに柄先が切止きりどめではなく擬宝珠風ぎぼしになっている。これについて青木翁の語るところによれば、民藝館の二階広廊下で柄杓の作業をしていたとき、濱田庄司が通りかかり、「柄杓も茶杓も切止めが決まりであるのに、どうしてこんな形にするのか」と訊いた。そこで柳先生の指示だという、濱田は「それはちがう。私から柳に話してみよう。」といったという。しかし結局柳は、自らの創案を変えることはなかった。もう一つ、柄杓の合を表皮付で制作しているが、これも柳の強い意思であった。青木翁によると、何回作っても翌日には青竹の合が乾燥して割れてしまい、十個に一つか二つしか残らなかったという。今の市販の品が表皮を

柳が青木に送った葉書。水差の蓋の藤巻きの依頼が略図を添えて書かれている。



むいた芯だけの作りであることの理由がよくわかったと述べていた。

しかし柳は自説を曲げず、とうとう真竹の表皮付の柄杓を二、三個、青木に作らせたのであった。いま民藝館にはこの折りの作はないという。恐らくは何ヶ月かして割れてしまったのではないだろうか。

また第一回茶会の折り、浅川咲、園絵と共に柳の手助けに力を尽くした近藤京嗣に聞いた話によれば、指示図にあるような、柄の先を籐でまいた竹柄杓も作られたが、これは結局、茶会では使われなかつたという。試作されて用いられなかつたのは、ほかに本藍染め手織り木綿の出し袱紗などがあつた。

柳による茶道具の新しい見立てや創作、そして現代にふさわしい茶会の構成も、その後間もない彼の病臥のため中断のやむなきにいたつたことは、返すがえすも心残りなことであつた。

青木さんと竹のインテリア

さて戦後の新作竹工の先駆者ともいえる青木隆介さんは戦後の昭和二十三年(一九四八)竹工を志し、銀座三越で「青木工房展」を開いたのち、たくみを訪れ、さらに柳宗悦との縁にも結ばれて、生涯一途に身近実用の竹製品を作りつづけてきた。ペーパーナイフの第一回日本クラフト展入選をはじめ、電気スタンドの農政局長賞受賞を重ねても作家を目指すことなく、無名の工人として一生を終えられた。

ところで、柳が青木に作らせたもので代表的といつていい作は、何といつ

ても竹の額であろう。今年の一月六日から三月二十二日まで、日本民藝館で開かれた特別展「日本の民画―大津絵と泥絵」展でも、大津絵の額装に十余点の青木の仕事があった。また江戸時代末期の泥絵にも二点ばかり、彼の額が展示されていた。

これらの額の制作年代については推測するしかないが、筆者の知る昭和三十年五月にはすでに類品がたくみで



強製紙張りのぼんぼり。柳から新作展への出品を勧められていたが、柳の存命中には果たせなかった。

販売されていたから、その二、三年ほど前かと思う。

竹の額は柄杓とちがって青竹ではなく、油抜きがされた孟宗竹もうそうちくが主で、胡麻竹も使われている。初期大津絵の仏画や中期あたりの作に良く合ひ、柳の見立てによる中まわしの表装も美しい。また軸装の大津絵には一点だけ軸先に胡麻竹を用いているのがあったが、これも柳の指示で青木が細工したものであろう。

青木の作としては、このほか「工藝ニュース・昭和二十七年九月号」(丸善発行)所載の竹マガジンラックや、昭和三十一年度日本民藝協会新作展入選のランプ三種、柳から新作展に出品するよう勧められたという竹と強製紙による「ぼんぼり」など資料が残されている。また先に記した、柳による柄杓の指示図面と、水指の蓋の籐巻き依頼の葉書などの資料を写真で紹介したい。

たくみ企画展(予告)

第十回記念

阿部真土作陶展



色絵福寿文八寸皿

会期 平成二十一年六月二十七日(土)

〜七月二日(木)

六月二十八日(日)は営業いたしません。

会場 たくみ二階サロン

営業時間 午前十一時〜午後七時

(日曜日、最終日は午後五時半まで)

エッセイ 冬の花（餅花）

瀧田 項一

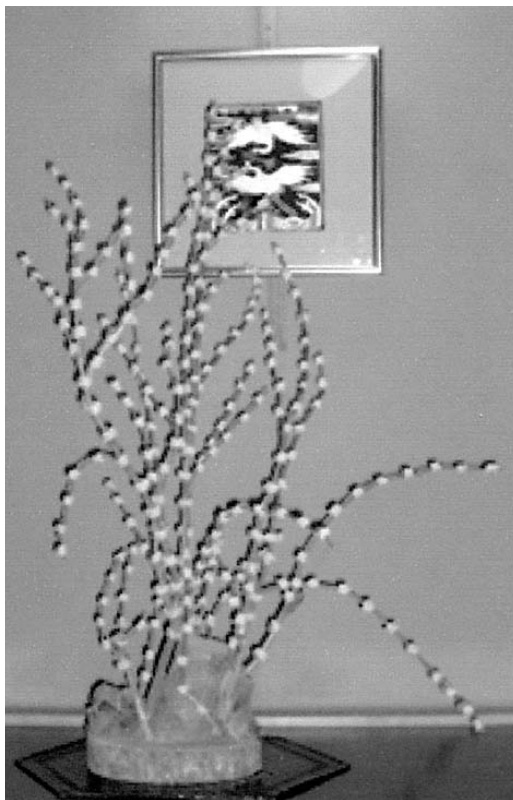
近頃は、めっきり家々に残された年中行事が消え去ってしまい寂しい限りである。

おお忙しの中で迎えた正月も、アツ

と云う間に過ぎて、メ飾り、かど松を取り払い、十五日の小正月を迎えると餅花を飾る。

地方によっては繭玉を飾って家内繁栄を祈ったものである。飛騨地方は今でも餅花が盛んに作られて、雪降る冬日を美しく飾っている。

関東や東北は、団子に丸めた繭玉を飾った。食紅で赤、黄そして緑に彩り、



飛騨の餅花

みず木の小枝に挿して、大神宮に歳の神に、恵比寿さまにとひと枝ささげて豊作を祈り、家業の繁盛を願ったものであった。

小枝の先まで餅の小片を丁寧にくっつけた餅花は、満開になった冬の花である。

雪国の冬には花が無い。神々に捧げる花も、閉ざされた部屋の中に飾る花もない。

先人達はナント心根の優しい、見事な花を思いついたことだろう。

美しい暮らし方を奥深く知っていた人々なのである。

※今の世に蔓延るクリスマスツリーは少々見直して欲しいものである。にわかクリスマスチャンとも達よ。

餅花や 灯立てて

壁の影

基角

（陶芸家・日本民藝館評議員）

台湾・先住民の

生活文化と日本(二)

さて、かつて高砂族ともいわれていた先住民は、日本時代、そして戦後の中国(漢民族)統治を通してそれぞれに同化を強いられ、あるいは土地の強制接収などでその独自の生活文化は失われつつある。また戦後、台湾や海外の愛好家が先住民の作る民具や衣服を蒐集し、日本でも何回かその優品の展示会が開かれ、その質の高さで人気を呼び愛好家で会場が溢れたほどであった。



貝象嵌の火薬入れ(台湾・パイワン族)

た。

このように世界の少数民族や先住民の、かつて豊かであった伝統の生活文化は多く失われてしまった。民族の生活文化と民具、衣服や芸能はその部族のルーツを表わしているのである。たとえばパイワン族の火繩銃に用いる火薬(煙硝)入の貝象嵌せうがんの模様と、インドネシアのロンボク島の工具・カンナの模様や技法の類似性を見ると、古代からの黒潮による人々の伝播、交流の歴史が想像できるのである。

(志賀直邦)



貝象嵌のカンナ
(インドネシア・ロンボク島)

あとがき

端午の前日五月四日に、新国立美術館で国展(工芸)を観た。鯉幟も見かけなかったがやはり春の風は麗しい。

今展では新人の作品に新鮮な印象を受けた。技術的には完成されてはいないが、茶綿の布に藍の絞りに染で繭玉かなにか、ゆらゆら“という題の如く不思議な形をつなぐ。茶の地の効果もいい。大鏝栄さんの作。奨励賞受賞。

もうひとつ、かわいらしい陶函があった。四角で、側面には雲か葉か、背景の地色の中に浮かんでいるような模様がある。さくもなく楽しい。蓋は三角の屋根風だがメロン色の無地で、函と調子が違うのがかえっていい。岡本ゆうさんの作。

(S)

発行 株式会社たくみ

東京都中央区銀座八ー四ー二

発行責任者 志賀直邦

電話 〇三ー三五七ー二〇一七

FAX 〇三ー三五七ー二一六九

振替 〇〇一ー〇一ー二一三五六五九

定価 六〇円(税込)